大遠忌の歩みとその時代

第六回 親鸞聖人七百回大遠忌について

時代は、前年（一九六〇年）の日米安保条約改定をめぐる激しい政治対立が影を落としながら、政治が「所得倍増計画」へと大きく舵を取り、産業への大量の労働力流出にともなって人口の都市へ大移動が始まった。それは、「経済成長型」社会への転換であり、長きにわたる伝統的な教団基盤や宗教意識の激変をもたらす転機となった。長きにわたり宗門と結びつきをもっていた門徒世帯の、そして主として産業労働者として都市へ移住した青年門徒らの仕事、人間関係、家族、生老病死に関わるさまざまな不安、苦悩への対応、伝道などは、喫緊の教団の政策課題となるものであった。

さて、親鸞聖人七百回大遠忌法要は、本部長六人、局長九人、部長三十七人、理事十六人、顧問十二人、参議三十三人、宗務員二百九十七人、臨時所諸役員六十四人、奉仕員五百二十五人など、約千余人の総動員体制を整えて、第一期として一九六一（昭和三十六）年三月十日から二十日まで、第二期として四月四日から十六日まで、二十五日間、四十三座にわたって修行された。法要にあわせて「奉讃大師作法」が制定され、各座ごとに第二十三代勝如上人・大谷光照ご門主によって親修された。また、赦免に関する宗令第一号が発布された。

法要に先立って、七日午後一時半から園児大会が、九日午後七時から「親鸞聖人讃仰講演と音楽の夕」が新装なった本願寺会館で開催された。

法要は十日午後一時の逮夜から始まり、当日は団体参拝五千人に及び、さらに一般参拝者が加わり一万人を超える参拝者で、かけだし席を含む堂内は満堂であった。ご門主は次のような「御親教」を述べられた。

今日、御法義繁盛の実状は必ずしも十分とはいえません。聖人の大遠忌法要に遇わせて頂いた私共はこの大法要を機縁として、いよいよ御念仏のみ教えが栄えていくように御報謝に専念しなければならないことを痛感するものであります。そのように努力すること

本山・各教区の伝道車による市内パレード（1936年４月５日、本願寺前）

こそ聖人の御苦労と御恩徳におこたえする所以であると信ずるのであります。

法要第三日目の十二日午後一時十五分から龍谷大学大宮学舎講堂で布教使大会が開催され、優良布教団の表彰が行われました。第四日目には、東京で学んでおられる大谷光真新門さま（当時）がお戻りになり、法要に初出座された。

十日から二十一日にかけては本願寺展観室と龍谷大学図書館で本願寺所蔵の法宝物を展示する「本願寺展」が開催された。そして、法要は朝日放送をキーステーションとして実況中継されたりもした。

第二期は、四月四日の日中法要から十六日の日中法要まで修行された。前日の四月三日にはご門主の父であられる大谷光明師が遷化され、深い悲しみを抱えての法要となった。

第一日目の四日午後一時から宗務所第一会議室で総長武田達誓ら約五十人が出席して産業道友会が結成された。それは仏教精神にもとづいた互いに相手の立場に立って静かに考え、社会によい職場をつくり、あわせて平和と幸福に富んだ社会の実現などを目指すものであった。

二日目以降の主な行事を列挙すると、以下の通りである。

第二日目の五日午後十二時三十分から本願寺会館で約五百人が参加して布教使大会が開催され、本山および各教区の伝道車が賑々しく市内パレードして、法要参拝を呼びかけた。

第三日目の六日午後二時三十分から御影堂で海外から約六百人が参拝して、海外先亡者追悼法要がご門主の親修で修行された。

第四日目の七日午前十時から御影堂で

団体参拝の電車内では「列車布教」を実施

「こども大会」が開催され、全国各地からボーイスカウト、ガールスカウト、日曜学校生など百三団体約一千百人が参拝した。

第五日目の八日午後一時から本願寺会館で約五百人が参加して、本派社会教化大会が開催された。

第六日目の九日午後一時から本願寺会館で「全国仏教青年大会」が開催され、ご門主は「仏教青年会に消息」を発布した。

「こども大会」では太鼓演奏を披露（4月7日、御影堂）

第九日目の十二日午前九時から本願寺会館で約五百人が参加して全国少年指導者大会が開催、午後一時三十分から約一千人が参加して全国保育大会が開催した。ご門主は、「幼少年の教化にたづさわる人人へのご消息」を発した。

第十日目の十四日午後一時半から御影堂で宗門学徒約一万人が参加して奉讃学徒音楽法要が行われた。また、派内出身並びに宗門関係学校「教職員大会」が午前八時三十分から約五百人が参加して本願寺会館で開催した。

第十一日目の十六日日中法要で法要は御満座を迎え、ご門主は「ご満座ご消息」を発布した。当日、午後六時半から岡崎京都会館第一ホールで、親鸞聖人七百回大遠忌記念演奏会が開催され、新たに作詞作曲された「歎異抄」などが演奏された。

この間、四日から十六日まで「本願寺展」を開催、七日から十五日まで市内高島屋で「西本願寺名宝展」を開催し、本願寺展は約五万人、「名宝展」は約三万五千人を数えることとなった。このように親鸞聖人七百回大遠忌法要は、全国から約四百人の法中が出勤し、参詣者は団体参拝者を含めて延べ数約百万人にのぼった。

親鸞聖人七百回大遠忌の翌年に、門信徒会運動が提唱され、全教団の取り組みとなった。まさに新たな時代社会のもとでの教団が抱える課題を担い、僧侶と門徒のありようを見直して教団および寺院活動の展開をはかろうとするものであった。

いよいよ四月には親鸞聖人七百五十回大遠忌が始まる。この勝縁にあわせていただく私たちは、今一度、共有する宗門の課題を再確認しておきたいものである。

（本願寺史料研究所長　赤松徹真）